

昔むかし、あるところに、十人の兄弟がいました。一番上の一郎は早耳で、どんなに小さな音でも聞き取ることができました。次郎はどんなに遠くでも見える千里眼でした。三郎は力持ち、四郎は石頭、五郎は鉄人、六郎は足長、七郎は大頭、八郎は大足、九郎は大口、十郎は大目玉でした。

ある日のこと、兄弟は、畑をたがやしに行きました。すると、早耳の一郎が、だれかの泣き声を聞きつけました。そこで、千里眼の次郎に、

「だれが泣いているのか、ながめてみてくれないか」といいました。次郎は、遠くをながめていいました。

「始皇帝の命令で万里の長城を作っている人たちが泣いている。お腹がへって泣いているんだ」

すると、力持ちの三郎が、

「おいらが行って代わってやろう」といいました。三郎は、お昼前に着くと、その日のうちに長城を作り終えてしまいました。

始皇帝は、三郎がものすごい力持ちなので、こわくなって、首を切って殺してしまうよう、家来たちに命じました。それをながめていた次郎は、

「たいへんだ。始皇帝がうちの三郎を殺そうとしているぞ」とさげびました。すると、石頭の四郎が、

「おいらが行って代わってやろう」といいました。四郎が行くと、始皇帝の家来たちは、四郎の首を切ろうとしました。ところが、どうしても切ることができず、何十本もの剣をだめにしてしまいました。

始皇帝は、四郎の体をこん棒でなぐらせることにしました。四郎は泣き出しました。

「また、だれかの泣き声が聞こえる」と、一郎がいうと、次郎がながめて、

「たいへんだ。始皇帝が、うちの四郎をこん棒でなぐり殺そうとしているぞ」とさげびました。すると、鉄人の五郎が、

「おいらが行って代わってやろう」といいました。五郎が行くと、家来たちは、五郎をなぐり始めました。ところが、いくらなぐっても殺すことができず、何十本ものこん棒をだめにしてしまいました。

始皇帝は、五郎を海へ放りこむことにしました。五郎は泣き出しました。

「また、だれかの泣き声が聞こえる」と、一郎がいうと、次郎がながめて、

「たいへんだ。始皇帝がうちの五郎を海の中へ放りこもうとしている」とさげびました。すると、足長の六郎が、

「おいらが行って代わってやろう」といいました。六郎が行くと、すぐに、海の中に放りこまれました。ところが、海の水は、六郎の足の甲までの深さしかありません。魚をつかまえるのにちょうどよい深さでした。六郎は、二、三十キロもの魚をつかまえました。ところが、ぜんぶ入るだけの入れ物がありません。そこへ、大頭の七郎が、ようす

を見にやって来ました。六郎は、

「やあ、七郎、いいところに来てくれた。おいらは、二、三十キロも魚を取ったんだけど、入れ物がないんだ」といいました。七郎は、麦わら帽子をぬいで魚を入れました。魚は麦わら帽子の半分にもなりませんでした。

六郎と七郎は、魚をかついで帰りました。けれども、たくさんの魚を焼くだけの薪がありません。すると、大足の八郎が、

「おととい、山へ行ったとき、足にとげをさしたんだ。こいつをぬいたら使えるかもしれない」といって、とげをぬいてみました。そのとげは、天までとどくほどの大きな木でした。力持ちの三郎がその木を割って、口の大きな九郎が火を吹いて、薪をたきました。

やがて、九郎が、

「よく焼けたかどうか、ひと口食べてみよう」といいました。九郎がひと口食べると、魚はぜんぶなくなってしまうました。魚を食べそこなつてあてがはずれた十郎は、泣きだしました。大目玉の十郎が泣くと、初めはしとしと小雨のようでしたが、しみにぎあざあぶりの大雨のようになりました。

とうとう、十郎の涙は大水になって、あつというまに万里の長城を押し流してしまいました。始皇帝は、海まで流されて、すっぱんのえじきになったということです。